

桃

「桃がよく成った、今年は。見に行ってみろ。」

好きなだけ取っておけ。」

朝食の時、兄さんが言った。

昨日から、俺は兄さんの家にいる。

ずっとしばりつけられていた仕事は、ようやくひと区切りした。

ふらっと旅行でもしたいところだが、三日後には、次の仕事の顔合わせが待っている。

事前に読まなくてはならない書類もある。

自分のアパートにいるのもつまらなくて、俺は兄さんのところに転がり込んだ。

独身の弟を、兄さんも義姉さんも嫌な顔ひとつせず、迎えてくれる。

これまでに何回、こんなふうに移り込んだか、わからない。

田舎の大きな家だから、たしかに泊まる場所はあるが、家族がいて、農作業もある中、ただの居候が歓迎されるとは限らない。

ありがたい。

つい甘えてしまう。

朝食が終わったダイニングテーブルにパソコンを広げ、俺は、次の案件についての概要を読んでいた。甥や姪は学校に出かけ、家の中は静かだ。

「恭平さん、お留守番よろしくね」
土間で姉さんが言う。

俺は立ちあがり、畑に行く二人を見送る。

朝早く、既に一度、兄夫婦は畑に行っている。

二人が帰ってきた音で、俺は目を覚ました。

昨夜も、俺と同じくらいは遅くまで起きていた。いったい何時に、起きたんだろう。

ほとんど毎日事務所で寝泊まりしている俺も、二人の勤勉さにはかなわない。

「桃、取っていいの？嬉しいな。納屋の近くだよね。」

「蜘蛛の巣もたくさんあるから、気をつけろよ。」

「恭平さんなら、背が高いから、たくさんとれそうね。」

姉さんも、兄さんの後ろから声をかけてきた。

姉さんは、以前に俺が贈った長靴をはいている。

かっこいい人だから、派手な模様がよく似合う。

「泥だらけでごめんね、せっかくもらったのに」

「どういたしまして。使ってもらっている証拠だね」

「俺にはいつ届くんだった？」

「兄貴のはどこで買っても同じさ」

書類をようやく読み終わって、俺は庭に出た。

畑と庭の境に、実のなる木が植えてある。

「果樹園というほどじゃないけどな」

兄さんはそういうのが、家族が食べる果物は十分まかなえる。

ゆずやリンゴは、これまで俺も収穫したことがある。

ブルーベリーもある。

ブルーベリーは、毎日少しずつ採っては冷凍する。ある程度の量になったらジャムを作るのだと、姉さんは教えてくれた。

青黒い実を、一つ、つまみ取り、俺は口に入れた。

ラズベリーもある。

気まぐれにこの家に来て、収穫だけを楽しむのは申し訳ないが、これが俺の一番の楽しみかもしれない。

なんとなく畑を見回る。

木の根元に座って、煙草を吸う。

タヌキがカヤの実を食べに来ていたと、昨夜、姉さんは言っていた。

おれもタヌキみたいなものだ。

兄さんの家に来て、うろろうろして、何か食べてさよならする。

庭の奥に行くと、目当ての木は見つかった。

桃の木を知らなくても、今の時期なら誰でもわかる。

水蜜桃が、百個以上鈴なりだ。

俺の胸のあたりにもなっちはいるが、頭上の枝がしなっている。

今一度納屋に行き、剪定ばさみや脚立、踏み台やらを木の下に並べる。

さあ、収穫だ。

目星をつけた桃を喜んで取ってみると、鳥に食べられている。

悔しい。

食べられているところだけ取ったら大丈夫かな、とも思うが、鳥の残りを食うのも、なんだか悔しい。

やっこの思いで取っただけに、鳥に馬鹿にされたような気持ちになる。

今度はきれいな桃を見つけた。

うれしい。

何もかも忘れて、俺は桃を枝からとるのに懸命だ。

食べられた桃は鳥用にしておき、そのままにしておくことにした。

籠に桃がたまっていく。

桃に指の跡をつけないよう、そとつかむのが難しい。

桃を探し、脚立を木の下で移動する。

足場が柔らかすぎで、どうも具合が悪い。

桃と土と枝、そればかりを考えている。

ここで野菜や果物の収穫にいそしむ時、いつも感じることがある。

俺が取り損ねたものは、いくつあるのだろうか、と。

畑では、きゅうり、なす、いんげんが盛りだ。

緑の葉の中にうずもれた、緑の野菜。

すべて取ったつもりだが、よく見るとまだある。

ここにも、あそこにも。

一心不乱に探す。

俺は欲張りなのだろうか。

せつかく大きく育っても、誰にも気付かれない野菜がある。

大きく実って、その上で収穫されて初めて、よい農作物になる。

大きく実っても、人の手に取られることもなく、葉の陰で、萎れていくものもある。

摘み取られたか、畑に残ったかの違いでしかない。

そういうことを気付くと、すまないなという気持ちになる。

人間も同じだなと、そんなとき思う。

木の下に座り込み、俺は桃の皮をむいてほおばる。甘い汁が滴る。

果肉のクリーム色に刷毛で赤をちらしたようだ。どれをとっても同じ模様がない。

ひとつ、ふたつと俺は桃を食う。

うまい。

見上げると、枝に鳥が来て、俺を見ていた。